

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 56 回 業即信仰～先代 17 回忌にあたり

恐縮ですが、今回は実に、プライベートな話。

今年（2004 年）の 8 月 18 日は、IKG 創始者である先代「飯島岱蔵」代表の十七回忌にあたる。大正 8 年生まれだから、存命すれば 85 歳になっていた。このコラムでも、何度か先代の話は掲載させて頂いているが、小生と違って、かなり偉かった人である。

40 歳代で熊谷市の監査委員、社 中小企業診断協会埼玉県支部長、50 歳代で熊谷税務署管内納税貯蓄組合連合会会長、熊谷商工会議所副会頭、関東信越税理士会会長、熊谷ロータリークラブ会長、近畿日本ツーリスト協定旅館連盟経営相談室長、60 歳代で全国税理士共栄会会長、日本税理士会連合会会長、大蔵省企業会計審査会委員等を歴任、70 歳代を経験せずして亡くなった。当時の官房長官、小淵恵三先生のお骨折りを頂き、正五位勲三等瑞宝章という授位叙勲の栄に輝いた人であった。

先代が常々口にした言葉に「業即信仰」というものがある。

我々の務めは職業を通し社会に貢献していくことだ。そのためには「業」を尊び、あたかも「信仰」の如きに高めていかなければならない。人のために奉仕して、決して恩に着せないこと。全ての行動に限りない慈愛を抱き、認め合い、許しあいながら、お互いの信仰を高めていく...そんな気概を持って、職業に邁進しなければならない。先代の座右の銘「業即信仰」とは、こんな意味だったに違いない。

先代が亡くなって、丸 17 年が経過しようとしている今、二代目後継者としては、何とも、いたたまれない思いでいっぱいである。常に先代と比較され、先代が偉大であればあるほど、そのプレッシャーは重く^お押し掛^かかってくる。後継者の宿命とはいえ、たまには逃げたくなる時も、あった。うまく行って当たり前、何故なら、先代はうまくやっていたから。仮に結果がまずかったら、その人格まで否定しかねない、無言の圧力は、二代目後継者・本人でないと分からないかもしれない。

とても「業即信仰」の域まで達しきれず、いや、生涯先代に追いつけないでいる二代目後継者は、小生一人に限るまい。多くの後継者は、悩み苦しみ、先代の偉大な亡霊^{ゆゑ}を拭い切れずにいるのが現実かもしれない。

そうであってはいけない。頭や心で分かっているつもりだが...、決して甘えや逃避に明け暮れている訳ではないのだが、この、浅学未熟^{せんがく}の解消には、まだまだ時間が必要のようである。十七回忌のこの日に、生真面目（？）で、繊細（？）な二代目後継者は、やっぱり反省の日々を送っている。先代と真っ当に話が出来た日が来るまで、黄泉^{よみ}の世界には旅立たないことにした。あの世でも師弟関係では、たまらんから...